
ア・DAY・いん・アワ・L i f e

ねこの目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ア・DAY・いん・アワ・Life

【Nコード】

N7154H

【作者名】

ねこの目

【あらすじ】

メリーという、女がいた。いやまあ、顔なんて見た事はない。声だけ。何故なら、彼女は俺の中にいた。他の人には聞こえない。何故なら彼女は幽霊みたいな神だから。……じゃあ、霊能力者なら見えるのだろうか？

merryXmasな日

「お起き、坊や」

親ふんしたサンタクロースにプレゼントをもらったり、普通にもらったりもらわなかったり。それは人により大差がある。ちなみに俺は眼鏡ケースをもらった。別にクリスマスにもらうものでもないが、まあ、最近眼鏡ケースが壊れたから、普通に喜んだが……。

そんな、クリスマスの晩の事だった。夜、何かがうるさい。声があるのだ、多分女。ていうか絶対女。声は高くなったり低くなったり。気になって目を覚ますと、そこにはだれもない。

暗闇に目が慣れ、だんだんと辺りが見えるようになるが、それでも人はいない。

「誰ですか？ 泥棒？」

俺は簡潔にきいた。

それでも返事は何一つない。……空耳だったか？ もう一度辺りを見ても誰もいない。再度頭を枕に沈め、目を閉じた。

「坊や、何故寝るの？」

今度は、気のせいじゃないとはっきりわかった。『気のせい』が言葉を喋るわけなかったのだ。

ただ、おかしい。隣に眠る兄は、この声には気付いてなく、ちゃんとというか、一般人間の如く眠っているようだった。

「誰？」

「……」

微かに、そしてはつきりと、息の音が聞こえた。

「目が……覚めた？ 怖い？」

女。

女の声だった。

「今日は、今年のクリスマスからは、全国で俺みたいな性格の奴は女の声聞けるようになったのか。」

「うつん、君だけ。わからない？ 私、人間じゃないよ？」
そりゃそうだ。

横を見ると、兄は相変わらず眠っていた。一つ溜め息を吐いて、俺は目を閉じた。

「アンタには悪いけど、今、ぜんぜん怖くない。」

「何で、私には悪いの？ ……まさか、幽霊は脅かすのが職業で、自分は全然怖くないから私に同情……なんてことはないよね？」

「もしそうだったら？」

「決まってる、坊やも分かってる。呪い殺すよ、幽霊の如く……ぎゅぎゅつとね」

「ごめんなさい」

怖い。平然と、『普通人間の言わない事』を言っている女の声が怖いのだ。それが怖いだけで、別に『女の声』が怖いんじゃない。

大体、女の声は俺の事を『坊や』と呼ぶほど年上でもない、いたって普通の、そう、俺くらいの女の年の声。いつも普通に学校できいていそうな声。

「……坊や、名前は？」

「佐藤」

「下は？」

「太郎」

「本当は？」

「弘樹」

「本当は？」

「……隆史^{たかし}」

「そ、いたって普通の名前だね。まあいいわ。メリークリスマス、たかし」

何がいいのか分からない。

本人には自覚がないと思うが、何故だか自分の名前を卑下^{ひげ}されているような感じがした。

「お前、名前は？」

「ないわ。つけてくれて構わない」

「……んじゃ、メリーかクリス。普通に『幽霊』ってのもいい」

「メリーでいい。気に入った」

コイツのセンスを疑った。

まあ、でも自分にはなんのメリットもないわけで、受け流す。

「メリークリスマス。メリー」

強制的に、『駄洒落^{だじゃれ}』を言わされているようにも思えた。

家族の眠る夜の会話

「メリー、お前、どこにいるんだ？」

「なにいつてるの？　ここにいないじゃない。…アナタ馬鹿そうだからそんな事言っても分からないわよね。詳しくは貴方の脳の中。言葉は左大腦の一部、思考は大腦の前頭葉の前部、運動は大腦の前頭葉の後部、知覚は大腦の頭頂葉の前部、記憶は大腦の側頭葉、視覚は大腦の後頭葉。」

「……あ？」

「今は大腦の頭頂葉の前部……ね」

「大の……なんだって？」

「坊や…あなた、ホントに馬鹿ね。言われた事は一回で覚えなさい。…私も人間の時はそんなだったのかな？」

メリーは静かなお嬢口調で俺に嫌味をぶつけた。俺はメリーに対して爆発しそうな何かを必死で抑えて、椅子に腰かけた。

「で？　お前はいつ俺から成仏してくれるんだ……？」

「『隆史が死ぬまで』…じゃないかしら？」

こいつ……。この先ずつと10年20年…50年……一生、俺に付き纏^{まと}うきか……。ウザったい。

「ねえ隆史、さつきから思ってたのだけど、私の事をそんなに嫌わないでよ。ぎゅぎゅつとしちやいたくなるの」

きらわないで？

なんでそう思うんだ？　まあ確かにそうだが……、これじゃあメリーが俺の考えてる事がわかる事になるじゃないか？

「嫌いなんて思っていないよ、……全然」

「一つ言つとくけど、君が思ってる事考えてる事。大腦の前頭葉の前部を覗けば一目瞭然だわ。…気をつけてね」

気をつけて…。気をつけて？

「それは俺が気を付けるんじゃない、お前が気を付けるじゃない

のか？」

「あら、そうなの？ 隆史がそんな事を考えなければ、私はぎゅぎゅっとなんかしないわ。だから、隆史が私に対してそんな思いを抱かずに気を付ければいいのよ。分かった？」

全然わからない。

ていうか、わかつたしといたくない。なんだその身勝手すぎる注意は……？

地球はメリーを中心に回っているのか？ 違っだろ。

お友達は脳の中（前書き）

結構悲しい題名ですよね……。

ヒッキー（ひきこもり）ではありません。ただ人と接するのが苦手な隆史君なのですよ。

お友達は脳の中

「予知夢っ？」

「そう、58、179…の確立でな」

そう言い放ったのは、コイツが俺の脳内に現れて向かえる朝だった。——それは、俺が規則正しくない寝息を立てている……そう、深夜4時くらいの事。

まるで真実かのような、リアルな夢をみた。

登場人物は俺、兄、母。

単に喧嘩して怒られると言ったが、その後叩かれる痛みが、起きた後、妙に残った。よく何かにどこかをぶつけた痛みと言うものがあるが、俺はそうじゃなかった。

その時。痛みに耐え切れず目を開けた時。

俺は布団の上で正しく寝ていた。家具とか、針とか鉄鋼とか、そんな武器のような物は一つも近くにはなく、むしろない方がおかしいようなものまでなく。

そして先ほど。メリーに説明を受ける少し前。

夢が現実になる。

一言で言えば、正夢。だ。

「昔、まだ着物の時代だった頃。私は一人の男の脳に憑いた。その男は予知夢を良い事に、商売を始めた。予知師よちしと言う物だったわ。一つの予知は高く売れ、男はそれはそれは儲かった。だけどもある日の晩、彼は死んだ。自分の首をぎゅぎゅつとしてね」

「縄か？」

「手」

「手？」

「……手。漫画やアニメでよくあるでしょ？ 指で掻き毟ったり、

手に刃をもつてきつたり、そういう物」

「……絞めたのか？ 自分で。首を。」

「そうよ」

平然と、なんの震えもなく。

彼女は、まるで慣れているかのように……。

「——まさか、お前にとり憑かれると、いつか……その、自分で首絞めて、死ぬのか？」

「……」

ANSWER .

メリーは何も答えなかった。

俺は恐怖に襲われる。身の毛もよだつ、……そんな感じ。

「身勝手だ」

「何故」

「当たり前だ。幽霊や化け、人間も。みな身勝手。だけど一番身勝手は、亡くなった奴が、この世に自分の居場所を求め、逃げ。写真に写ったり、声に映したり、はたまた人を脅かし。何をそんなにアピールしたいのか。早く成仏すればいいものを……。お前も早く成仏しろ、俺の道連れは止める」

「随分言ってくれるね。いつか私のお友達があなたをすばつとか、ぼかつ……とか、しに来るわ。絶対に」

「それは困る。ごめんなさい」

「いいえ、許さないわ」

メリーは笑った。ふふつと、妖しく。

俺は安心して目を閉じた。きつぱり『許さない』とは言われたが、何故だか、メリーの友達が俺のどこに来ないと思ってた。

だってコイツ、友達がいないと思われる。

「隆史」

「なんだ？」

「あなたにも、友達はいないのよね」

「……」

——友達、いないよね。

……だからどうしたというんだ。友達にでもなろうってか？

——ええ、そうよ。

……そうか。じゃあ、断わる事はできない。

およそ友達と呼べるものが、俺にはいないから。『友達になろう』
といわれて断わるほど、俺には余裕はない。

——悲しい子。いいわ、隆史。あなたに夢をあげる。私の夢、ア
ナタニ託スワ。

夢心地

夢、夢、夢。

夜になると、ほぼ毎日といっていい程夢を見る。

それは軽い悪夢だったり嬉しい善夢だったり、もちろん予知夢には変わりない。その夢にも慣れてきて、余り気にしなくなった、2週間。朝起きると、メリーは必ず『ごめんね』と謝っている。

言わなくていいよと言っても、うるさいと言っても、必ず、絶対、謝る。

「メリー、お前まさか取り憑いた奴全員にそんなうざったく謝ってたのか？」

「失礼だな、18人目からだよ、全員じゃない」

「18……18?! お前何人についてんだよ?! 5人程度だと思ってた」

「猿の時代から幽霊よ? 20万は軽く言ってると思う、もっと大袈裟に言ってみたら、50万超えてるか……」

「そんな人数殺して……! ……ごめん」

禁句だった。決して思っては、口にしてはいけないこと。

「なんで謝るの? 殺している事に変わりはないのだから、いいのに。でもそうだよ、自分は嫌な気分になるもんね? 分かるよ、何となくだけど」

「……」

メリーは気にしていないようだった。多分、きっと取り憑いた沢山の人にそういう事を言われたのだろう。

俺もその一人なのだ。

「隆史、自分を卑下するのはやめなさい。悪いことなんだよ? これじゃ友達もできやしない。最強なマイナス思考ね」

「あのな……」

「何、本当の事じゃないの。反論ある?」

「ア、リマセン……」

正月を過ぎて、もう七日か八日に突入する。

メリーは相変わらず俺の脳に存在していて、俺もまたそれを楽しむようになってきた。俺の15年の人生にはまずありえなかった、一日中話せる相手。

意識を持ち、言葉を使え、しかもそれが女子ときたら、もう楽しまずにはいられない。それが俺だ。

「だけど、脚みれねえんだよなあ……」

「脚？ ふーん、隆史は脚フェチなんだ」

「悪いかよ、」

「ううん。まだまだだよ、中には胸とかお尻とか指とか、マニアックなフェチが沢山いるの。脚なんて全然許せるよ」

胸……って、……俺はそんな物を好きでいるほどわがままではない。確かに望んだ事はあるが、それが偽の物もあるのだと言うことがわかった小1の時、俺のフェチは上半身の部分から、下半身の部分に変わったのだ。

——好きになった経緯は、父と母の部屋にある大体父が使っている机。

その引き出しの一角に、あったのだ。『グラビア写真集』
脚の綺麗さに、一目でくぎづけになりました。

8：27、起床

初めて話すが、後一週間程度で、俺の冬休みは終わる。充実していたと聞かれてみれば、まあ、していないのだろうが、そこはもうどうでもいい。

大事なのは、始業式から春休み前までの学校生活。

話してあるように、俺にはおおよそ友達と呼んでいいものがない。昼休みも、授業中も、俺は誰かに話しかけられないと、喋れない状況にあるのだ。

勘違いしてほしくないのが、俺はいじめられっ子ではないということ。

都合のいい事に、俺のクラスにはがき大将のような大きな体格をした……いわゆるデブがいじめられっ子となっている。

俺は、そいつの影に潜むだけ。いじめっ子がそいつに飽きれば、次は多分俺がいじめられっ子。

そして次はいじめっ子がいじめられっ子になるだろうな。

俺が思うに、クラスというのはそうやって構成されていくのだ。

俺はこんな感じだから、いつも勉強している。いわゆるがり勉。

あ、学校ではしていない。冬休みの宿題の、最後の書き初めも終わり、残りを優雅に過ごすつもりだったのだが、こいつが現れて、『ああ、俺の冬休みはもう終わったのか』と、改めて実感している。

とうとう来たのだ。本当の悪夢。

俺には到底たどりつけないと思っていた能力。そんなものに、うなされている。

*

メリーは、自分の事が分からなかった。本当の名前も、自分がどうして存在しているのかも。だから人の脳にとりついて、自分のいる記憶を探す。そして、消すのだ。

自分のいない記憶を持った人間を。

メリーは、猿の時代から存在している。

「じゃあ、メリーは猿なのか？」

そうではないらしい。

メリーいわく、もとは人間と同じ格好をしていた……と。ていうか、その時点で幽霊ではなく神的感じだというのは、どうなのか。

そう、夢から目覚めた俺は不思議に思ってた。

「…今日も……見たのか？ 夢」

「ん……ああ」

「ごめんね……」

「違うんだ、今日はお前、謝んなくていいんだよ」

「え？」

「お前の夢見たんだ。予知夢じゃくて、お前の昔の夢。…お前が、人間の脳に入って必ずやっていること」

それにしても、不思議な夢だった。

「必ずやっている事？ 私は必ず、何してるの？」

「脳を覗いて、その脳にある昔の自分メリーを探してんだよ」

「？ よく分からない、だって、その人は私見たいに、猿の時代から存在しているわけじゃないじゃん」

「でもお前は探してる。無意識のうちに……」

なんでだと思う？

そう、心の中で呟くと、やっぱり気付いたのか、メリーはううん……と、首を傾げた。

「隆史は…理由……分かるのか？」

「……分かるわけないだろ」

「そう……」

理由なんて…、わかってたまるかよ。

雲は流れた

「夏は、…俺が死んだら違う所に行くのか？」

研は、病院の個室で、夏に聞いた。

「研、君は死なない。死なないんだよ」

「なんで？ お前は俺を殺すんだろ？」

「…殺さないよ。研は私を救ってくれたから……だから私はあなたを殺さずにでていく」

研は、頭を両手で抑えて布団の中でうずくまった。

「駄目だっ！ 行くな、俺死んでもいい。死ぬまでいてくれよ……」
目からは涙がたれ、夏は困ったような声で研に言った。

「研？ 死んでもいいなんて一生かかっても言っちゃ駄目だ。君は私のような疫病神じゃない」

「…お前は疫病神じゃない！ いてくれよ……お願いだから…好きなんだ……夏！」

嗚呼、なんと馬鹿な子か。

自分を苦しめる神に恋心なんぞ抱きおつてからに……。
可哀相にな。

寂しかろう、悲しかろう、……辛かりう。死んでしまいたいのか。
私なら、すぐにでもお前を殺してしまえる。神経を支配して、脳から命令し、お前の体に流れる血を止めれる。

だが、今は駄目なのよ。お前は私の大事な人間だから。
唯一私を知っている者だから。

「研…、分かりなさい……」

「分からない、分からない！ ……夏は……俺が嫌い？」

「嫌いじゃない、…でもね。君はこれから、生きて、たくさんの人間を好きになる。恋人をつくって、時には別れたりもして、結婚して、子供をつくって……ほら、たくさんの楽しい事があるんだよ？
見えない私に死なされるより、生きてたくさんの経験をした

ほうがいいの」

「……でも俺、」

「聞き分けの悪い子は嫌いよ」

その日、私は研の脳を出た。

よく考えて見ると、私には『人の脳からでる』という記憶がない。無意識の内にとiいうのか、寝ている内にとiいうのか。とりあえず、私が人間を殺していたということに変わりはない。

だから、意識的に殺さず、人間の脳を出るとiいうのは、昔もこれからも、研しかないのだと思う。

それくらい、研は私にとってかけがえのない存在だったのだ。

研の脳をでて2年を越そうとしていた、ある日の雪の晩。私は隆史についた。

私には、もう『夏』と言つ名前ではなかった。

『メリー』

それが私。

神の中の疫病神、メリー。

兄のような存在とその他

初めて真面目に話す時に何だが、俺は今非常事態なのである。それはそもそも俺の兄の佐藤^{さとう} 隆児^{りゅうじ}のせい。ていうかそもそも、何故この話しに一切関係のなさそうな兄の名前を浮かべるのかを聞かれたら、まあ分かるだろう。バレるのだ、もうすぐ。この脳に存在する神の事が。

「……おい、隆史。最近いつも誰と喋ってんだよ」

兄勘付いて、この一言から俺の戦いは始まる。

俺はバレるまでの時間を延ばす。少しでも奇跡があるのならば、きっと、バレずにこのまま始業式にたどり着けるのではないかと。ただ知っていれば、この世に偶然等と言う物も必然と言う物も奇跡等も、人間の想像を遥かに超える程あるのだと思う。

この何兆億という時の中で人間の創造してきた物は、無意味な物も含まれているのかもしれない。人間の創造と言えば、小説、漫画、アニメ。これが一番人に近いのだと思う。一番神に近いのが、聖書や、予言の書。これは創造を遥かに超えている。言わば神の領域。

「は、はは。何言ってるんだよ」

話しがそれてしまったので強制的に戻るが、兄は感が鋭い。将来は刑事とか、正義に匹敵する職業がいいんじゃないかと思うくらいに鋭い。本人いわく、将来は普通にサラリーマンで良いらしいそうだ。確かに、兄なら窓際族などにはならず、次長・課長などとどんな昇進していけそう気がする。

そんな普通なサラリーマンを望む兄が何故俺の脳の中の神に気づきそうなのかは、すべてメリーのせいなのである。順を追って説明すれば、メリーのせいで兄が勘付く。兄が勘付いたせいで俺が言い訳をしなければいけないのだ。言い訳をせず、このまま兄にメリーを晒すと言う事は、兄の中にある俺へのイメージが、変体変人の最低人間と塗り替えられてしまう可能性が大。それに、もしそうなら

くても、メリーが俺を殺して、別の人間の脳に移ってしまうかもしれない。

人間交流が苦手で友達がいけないけど、俺は死ぬのが怖いし、四六時中異性と話せるこの状況を、俺はなくしたくない。横文字がわからない俺だからこそ、この状況を『ハレム』と呼ぶのだろう。

この考えを否定する奴に言っておくのだが、全くとっていいほど、意味は全然わからない。

「だから、お前誰と喋ってる？」

「誰となんて……兄……しってるだろ？俺友達なんていねえもん」

俺は兄を『兄』と呼ぶ事に、何の抵抗も無い。

オールオーケー。どんと来いだ。

「知ってんだぞ俺、お前、クリスマスイブ明けた日から何かと喋ってるだろ……おら、全部話せ。あれか？お前の好きなオカルトか？」

「ちっげえよ！」

兄が俺を見る時には、3つの法則がある。1つは全く目の瞬きをしない時。これは喜ぶ時や嬉しい時、楽しい時である。2つ目は、下唇を噛む事。これは興味、苛立ち、怒りを表す。3つ目は特に何も無い時。これは普通の状態を表す。

今の兄は、3つの法則の中で2を表している。そこで分かるのだ。兄は知りたがっている。知りたがって知られなくて、苛ついている。

「ほら、喋ろ！」

手で頬をぐにゅとつかみ、顔を近づけてくる兄に、俺はぎよつとなる。

兄は何に関しても、何かを得る為には手段を問わないのだ。

殺される。話さなきゃ、殺される。

でも、喋りたくない。絶対に話さない。

「何も無いって！ほら、あれだよ！頭狂ってんだよ。友達いなさすぎてさ！」

「頭狂ってる奴がそんな事言つかよばーか」

そんな事言われたら挫けるよ……。

あ、……。

俺挫けた。

「と、にかく！ 俺は何も隠してないから！」

俺は戦うとか言っちゃってるけど……駄目だ。

逃げる。これはもう負けるのが決まっている。

「あ、逃げちゃうの」

ふと、脳の中から耳を伝って女の声が聞こえた。メリーだ。

頼むから声をかけないでくれ！ ついでも、口で声を出してしま
いそうで怖い。声に出さなくても泣きそうだー！

「んじゃあ！ 俺これから雑誌買いに行くから！ エロ雑誌！」

苦笑いを浮かべ、俺はゆっくりと後ろを向く。そして、兄に肩を
掴まれる感覚を味わう約0.5秒前。 全力ダッシュ。

「あ、おいコラ！ 逃げんじゃねえ！ お前、脚以外に興味ねえの
知ってたぞ！」

なんで知ってたんだよ兄！ 誰にも教えた覚えねえぞ！ しかもそ
んな系統の雑誌だってちゃんと隠してあるはずだし！ 布団の下に
隠すっていうのは、凄くベタ過ぎたか……？

最悪だあー！！

*

すぐさまダウンジャケットと黒いマフラーをまとい、家をでた。

そのまま少し全力疾走をして曲がり角を曲がった所で俺は走りを
緩めた。

「ドツと疲れた」

「隆児は隆史と違ってカッコいい所があるな。どつきんってしたぞ」

「あー……そーですか」

毒舌メリー！

「ところで、隆史。あの子はどうして隆史に対してはああも感情的
になってるのかな？」

「ああ、俺虐められてたんだよ。幼稚園の頃な。もう引越したか
らその時の奴等は近くにいないんだけどさ。それでじゃないかな？

俺、友達いないし、虐められてないかって思って、放って置けないんだろ。兄優しいし」

思っ限り、こんな年になってまで俺等ほど仲の良い兄弟はいないだろう。

俺は兄を慕い、兄は俺を信頼している。こんなに仲が良くて性格も違いすぎて、理想的なのか、その逆なのか、不思議になる。

親も親で、なんかかんやでオシドリ夫婦。俺はそんな父や母が苦手だが、兄はそうではないらしい。だから、親とは兄を通じて、普通の親子だ。だから俺の家は、兄を中心として時計が回っている。兄がいなければ、親とも上手くいかないし、きっと人間とも話せず鬱^{うつ}状態になっている。

兄歳々だ。

「本当、好きなんだね。『お兄ちゃん』」
「うん」

俺は今、兄の立派さに浸っている。

…の筈だ。

なのに何だろうか、この違和感。誰かにこの会話を聞かれているような。

どこだ？ 誰が聞いている？ 兄？ いや、違う。……知らない人。唯の他人？

——メリー…。

俺は咄嗟に心の中でメリーと会話をする。

「なに？ どうかした？」

——後ろに誰がいる。

「何言ってる？ 誰もいないじゃない」

——いる、誰がいる。

雪を踏む音も、息の音も、何もないけど。

確かにいるじゃないか。誰か……。

いる、いるじゃん。後ろに、ああ、違う。すぐ横に。

誰、じゃない。メリーのように、人間ではない物。疫病神、死神、

貧乏神、幽霊、お化け。… ようするに化け物と呼ばれる種。

——ああ、もう、横にいる。

「……」

メリーは驚いた。

静かに冷静に驚いた。

だから俺は静かに聞いた。

——逃げる？

メリーは何も話さなかった。

メリーが喋らないから、俺は何がなんでも横を見ようとしんない。見ない。ちらつとも、じーつとも、見たら喰われる。そう思うほかなかった。硬い決意なのだ。

だって、充血した目をぎよろつとこつちへ向けて、大きな口をあけてヨダレを垂らしているのが伺えるから。横を振り向かなくてもわかる。

大いに顔が近すぎる。

そいつは俺の頬に鼻息と、口からでる息を遠慮もせずにかけているから。……怖い、気持ち悪い。

「あ……」

「…え？」

メリーが何かに気づいた模様だった。

「なんだって？」と聞こうとして、やってしまった。

瞬間にみつしりとした鈍痛が響く。いや、鈍痛なんて字で表せるようなものなんかじゃない。

肉が裂けて骨にひびが入り、もしかしたら折れているかもしれない。い。

殴られた。グーかパーか…もしくはチョキかもわからない。酷い一瞬だった。

左側の顔の感覚がない。痛すぎて涙がでている。それに鼻水と鼻血の混じった謎の体液が鼻から溢れ出る。尋常なもんじゃない。

あ、痙攣^{けいれん}してる。

多分、メリーは懸命に俺に話しかけ、俺の神経を引っ張り俺を呼び戻そうとしているはずなのだが。

もう駄目だ。意識が飛んじゃう。

MI5。マジで意識飛ぶ5秒前。……ていうか駄目だ。意識飛ばないように略語とか思いついたけど、駄目だ。何が駄目だって？
5秒も待つてられないって事。

意識が薄れて行くなかで俺が最後に目にしたのは、舌を垂らして汚い顔で笑っている、その化け物だった。

ああ、俺って。（前書き）

もう、縦書きの方でみて頂いたほうがいいのかもしないですね。

ああ、俺って。

「うん……？」

痛みは消えはしなかった。

ある意味、痛すぎて起きてしまったのだ。
窮屈な顔、体。包帯で自由を失っている。

「ここ……」

どこだろうか？

目も包帯でふさがれている。

家にいるのか…。

でも、何か違和感。……ああ。俺の部屋じゃない。

こんな匂い、俺の家のどこの部屋にもない。

「どこだ……？」

「おお、おお。一人言か。結構結構」

男……いや、女？ よくわからない微妙な、アニメ声だ。

「そつだ俺、殴られて……」

まず顔、話している奴の顔をみたい。

不器用かよ。

「じゃ、今から質問するから、ちゃんと答えるように」

「ん？ 質問？ なんで今……」

「記憶質問、第一問」

ジャラン。と、そいつはふざけたように効果音をつけた。

「君の友達は何人？」

友達？ ……友達なんかいない、俺はいつも一人ぼっちだし。

「0人」

「第二問、今は何月？」

正月をあけてるから、今は、

「……一月」

記憶質問といえば、確かにそうなのだが、質問が軽すぎやしない

か？ もつとこう、『これは誰ですか』とか、もつちよい格好良いのがいい。

「第三問」

……。

あれ？ 質問がでない。肝心な質問。

間がたつて間がたち間がたちすぎ。

えーと、ざつと50秒くらいたった後に、そいつは口を開いた。本当、目が見えないと状況が把握できないな。

「君の、名前は？」

名前か。

簡単すぎ。

俺の名前は、

「……」

……俺の名前は…、えと……。

頭が回らない、名前が…浮かばない。自分の名前だぞ？ 大事な
大事な、親がつけてくれた…。

「名前…わからないだろ？」

「……うん」

「第三問失格。君は、記憶喪失」

記憶喪失…？ 俺があの？
きおくそうしつ

『ここは誰、私は何処？』って、お決まりの記憶喪失？

「俺……俺の名前は？」

「知らないよ」

知らない？

俺をからかっているのか？ それとも、本当に初対面の人。

「あんたの名前は？」

「小生こせいの名前？」

ふふ、と。そいつは笑った。

そして、俺の目の辺りに巻かれている包帯を強引に引っ張り、し

よきんと、ハサミできつたのだ。

暗かった視界が、いつきに明るくなる。

「小生の名前は……」

「……」

「なま風」

「……風？」

風。

彼は男だった。

女みたいな男。

以上に前髪が短く、後ろの髪が長く、なんとも不安定な髪型だった。それに加えてアニメ声。

TVからアニメの人物が飛び出してきたような感覚がした。

「ていうか俺……だれかに襲われてたような気がするんですが……」

「ああ、やつぱりね。偶然通りに差し掛かったときに、君が顔の半分潰して倒れていたんだ。小生に拾われていなかったら、君、人間に病院連れて行かれて殺されていたよ……いや、殺されていなくても、元の顔には戻れなかっただろうね」

なんだその、自分はその潰れた半顔を余裕で治せたみたいな。

いや、実際治せているから感謝しているんだが…。

それに、俺には一つ気になることがあった。

「お前、人間だよな？」

今の喋りかたからして、自分は人間ではないって言っているようではないのだ。

じゃあ、人間ではないのならなんなのか？ もうこの際、俺は何も驚かない。何故なら俺はもう、へんな化け物にあってるから。

「小生は人間ではない」

あっさりと。風はあっさりと肯定した。

しゃがった。

「小生はだ」

……？

？

「小生、青く染まる夜から降り立った（ほし）である」

「……星？」

星って、10角形の…？

「星には大きくわけて2つの種類があつて、小生のように人間と同じような形をしているのが白星^{しろほし}、君を襲った変な奴。人間の姿をしていない星を、黒星^{くろほし}という。まあ、言うなれば、小生達は人間にはない特殊な能力を兼ね揃えている、幽霊だ。何回か死んでいる」

あ、だんだんSFみたいになってきた。

「君を襲った幽霊。あれは小生の兄にあたる」

あの化け物……黒星が？

「…お前達兄弟は、生き別れとか何かつらい経験したからこうも要素が違うのか？」

「そうじゃない、無理矢理だよ。無理矢理、銀は黒星にされた」

銀とは、あの黒星の名前だと思われる。

「白星が黒星になる方法はいくらでもあるが、黒星が白星に戻る方法はない」

「…じゃあ、その……銀は誰に黒星にされた？」

「天使」

「は？ 天使？」

美女とか、可愛い……白い羽に、白い服装に心まで純白で汚れの無い天使？（もはや俺の想像する天使）

「うん、天使。天使は裁くからね。小生達を。……裁いた時に無罪になった者は黒星にされ、その後また裁き、有罪に仕立て上げる。天使達小生達が嫌いなんだ。神等と違って、ふら付いた者だから」

「まて……お前達は何で裁かれる？ 悪いことしてんのか？」

「君は幽霊に対して、どんな印象を抱く？」

「……まあ、あんまり良い印象は持たないな」

「そつ、それと同じだ。天使達も小生達を良く思っていない。だから裁いて、消滅させる」

……まで。

同情している場合じゃないぞ。

俺、こいつ等とは何も関係のない、普通の人間だぞ？ 記憶喪失の。

こんな話ししてどうすんだ？

しつかりと出来た女みたいな男、白星弟、凧。

反対に、天使によって黒星にされた黒星兄、銀。

「そこでだ……」

「……」

「小生に命と顔を救われた恩だと思い、小生を助けてくれ」

何か悪いことに巻き込まれていくような、そんな不安がすぐ目の前にあった。

「どうせ、記憶もない」

天使の裁き（前書き）

何気に5000文字近くあります。
気が引けるのでご注意？

天使の裁き

「助けてくれないと、小生、君の事を殺す」

「なんだそれ、脅しかよ?!」

「そんなもんだなあ、だって小生怨み屋だし」

爽やかな顔してひでえ事いいやがる。

ていうかそもそも手助けと言ったって、俺も俺で危機なのだ。

記憶喪失。

普通ならパニック症状起こして倒れてもいいんじゃないの的な。

名前も親も住んでる所も分からない。分かっているのはこいつとこいつの兄の事。

俺には全く関係のない事。

それに、その手助けも危うい。

だって、俺は一回半殺しにされたのだ。

こいつの、白星弟の、黒星兄。

「手助けはしない」

「なんとっ?!」

随分と驚きやがる。

「命の保障はするのか?」

「しない」

なんとも俺の考えてる答えとそっくりな答えだった。

「君も見ただろ? 銀は人間や白星とは掛け離れた姿だ。ドラクエとかFFにも出て来そうだったろ? 多分、雑魚ボスボスだろうけど」

おいおい…実兄を雑魚ボス扱いって…お前等兄弟では弟の方が主導権握ってんのか?

凄く恐ろしい兄弟だ…。

「じゃあ…雑魚ボスならお前一人でも倒せるだろ? 雑魚ボスは最初の方に出て来るもんじゃん。つまり、ドラクエでもFFでも、まずは主人公一人で倒すんじゃないのか?」

「そんなことは知らん」

うわあ、凄い。

そうか、そうか、こいつは大好きなお兄ちゃん以外には超がつくほど人間に関心も感心も沸かない白星くんなんだな。

「……君は小生に恩のおの字もないのか？」

「まあ、そりゃあるけど……命を捨てるような恩返しってないだろう？」

「だけど、君。小生が黙ってたら死んでいたかもしれない」

「……」

さつきから死とか死とか……なんて不吉な話してんだ俺……いやこいつも。

「小生に助けられずに死ぬのと、助けられた小生に恩返しして死んでしまうのでは、恩返しするほうが希望が沸かんか？」

沸かない。

全然と言っていないほど。

「やっぱり、恩はすげえ計り知れないほどあるけど、そんな手助けはできねえは。……お前達星は、ちよつとやそつとじゃ死んでも死ねないのかもしれないけど、俺みたいな人間はほら、死んだらそこで終わりじゃん？」

「……ま……あ、そうらしいけど……」

「俺は今記憶喪失で、名前すらもわからない。そんな奴が命捨ててまで人の手助けなんてしてらんねえし」

「……わかった」

おお、以外に物わかり良い奴……。

「じゃあ、小生君の事殺す……」

目をギラツとさせ、齒をギラツとさせ、凧はそういった。

「いやいやいや！ 待て凧！」

「待たぬ。小生は待たない性格である」

短期すぎる！

「死んだら小生が立派な星として育ててやろう。む、待てよ？ 星

では天使に殺されてしまうな。そうだ。悪魔にしてやろうぞ」

無駄な特典だー！

「どうする？ 星か悪魔。どっちがいい？」

……どうしよう。

上手く突っ込めない話した。

「星も悪魔にもならない。俺は俺だ、人間だ。死ぬ時はガンがいい」
「ガンなんぞ知らん。小生は殺された」

「それこそ知らねえよ、俺は殺されるのは御免だ。誰にも殺されねえ！ ここはお前等みたいな桁外れの能力をもった宇宙人の住む所じゃねえ！ 俺のような普通の一般の、頭と心臓取られたら生きていけねえ奴等の住む所だ！ 帰れよ！ 宇宙でも、月でもナメック星でも！」

切れた。

そうだそうだ、俺は誰にも死なせやしない。

「……聞き分けのならん奴め……」

「あ？」

「黙って死ぬ振りしてれば良かったのに」

「……？」

振り？

死ぬ振り？

「一つ言って置こうか。…君はもう裁かれているんだ」

「裁か……」

「何故だかわかるかい？」

「わからない」

「白星や黒星を眼に見ている時点で、君は普通の人間ではないという事だ。……しかり、それは特別な存在ではない。言うなれば……望まれていない、不幸な存在」

「……」

何を言っているんだこいつ。

人が切れている時には黙って聞いてろよ。

それになんなんだよ、まるで俺が、俺がこれから殺されてしまう
かのような口調ぶり。

認めねえぞそんなん。

「天使はすぐそこにいるんだ、…裁きはもう始まっている」

天使？ 裁き？

俺にはそんな世界関係ないぞ。

「君はどう思う？」

「……何が？」

「君が、小生や銀。いけ好かないアホ天使より高い格の持ち主って
事をだよ」

「はあ？ 何言って……」

「『神様』 あえて言うならそうであろうか」

神様？

何ホザイテンデスカ、凧サン。

ちよつと嬉しいけどさ、……俺はどっちかってえと、冒険ファン
タジーには欠かせない、暗黒な魔王様の方がいいよ。

「……そうだろう？ 天使！」

凧は大声で、天使という人物に訴えた。

勿論ここには天使と呼ばれる奴は誰一人いないはず。

ていうか、天使という名前であろうがそう愛着がついていようが、
『天使』なんて呼ばれたら恥ずかしいだろう。

逆に『悪魔』なんて呼ばれても結構困るだろうな。

「でてこい天使。どうせ裁きにくる事は目に見えてるぞ」

そう一言。

凧は大声で言った。

その一言で、少し、俺の視界に写る何かが変わった。

「……天使」

その目を良く凝らしてみると、やっぱり、壁が、壁がゆっくりと
浮き出てきたのだ。

「なにこれ……」

「何を言っている。あれが天使だ。言っているだろう」

壁が少しずつ少しずつ形を成していく。

「羽がないけど……」

「おお、まだ見習いだ」

壁と完全に切りはなれる前に、色づけされて行く。

白、青、黒……。

「……グロテスク」

「まあ、そういうな。『天使は純粹』なんてもう二度と知らない事だ。『天使はグロテスク』そう思いなさい。…なあ、天使」

風が天使と口にする。

「天使なんて呼ぶんじゃねえ！ 俺は天使だが、天使なんて名前じゃない！ 俺は俺の名前がある！」

天使が叫んだ。

怒鳴ったが正しいのか……？

ていうか、恥ずかしかった。

天使なのに、しかも見習いなのに自分が天使と呼ばれる事に拒否感抱くなんて、なんておかしい天使なんだろうか。

「ほう……じゃあ教えてもらおうか、天使君の名前」

「いいか、耳の穴かっぽじって良くきけよ？！ 俺の名前は……不

二子・ダ・ライアン・ミューズ・ピュア・ホワイトだ！ 聞いたか、分かったか、覚えたか？！ 俺は天使なんて名前じゃねえ！」

ピュア・ホワイト……？

名前に？

いやあ、確かに俺の妄想した天使にピュアなホワイトは凄く良く似合うけど。

「駄目だ……」

「風？！」

風がフラツと膝をついたのだ。

急いで手を貸してあげた。

「どうしようか、小生今凄く恐怖を感じる。……ピュア・ホワイト
つて…なんたる羞恥！ ……嗚呼、小生今初めて『世界は広い』と
実感した。ていうか、こいつの親に…いや、天界に訴えたい。何
故こんなかわいそうな名前をつけられたのか…今年一番の謎にな
るのであるぞ。何だろうかこの…動機・息切れ・目眩！ 小生は…
…死んでしまうのであるうか？！」

目をうつすらと開け長文をずらずらと並べる風。

「大丈夫だ風！ 星は心臓1突きされてもしないんだろう？！
気をしっかり持て！ 俺だつて倒れたい！」

「おいコラ！ 何、人の名前聞いて死のうとしてんだ！ 失礼だぞ、
今お前等酷い失礼な奴だぞ！」

俺がもしピュア・ホワイトと呼ばれるような名前がついていたの
なら、俺は天使や悪魔などと呼ばれる事を喜んでOKするだろう。
きつと。

いや、絶対。

「……まあ、お互い落ち着こうか。ピュア・ホワイト天使君」

「俺は不二子・ダ・ライアン・ミューズ・ピュア・ホワイトだ！
ていうか俺は天使君じゃない俺は……」

「分かっている。凄く長い名前なのだろう？ いままで2回行っ
てるぞ……だからこそピュア・ホワイト天使君なのだ」

そこで、ピュア・ホワイトは、はあとため息をついた。

分かっているじゃないと。

そう言った。

「俺は、天使君じゃなくて、天使ちゃんと呼ばれる側の人間だ」

え。

ええ？

天使……ちゃん？

「ええええええええ？?!」

「驚きすぎだ人間！」

そりゃあ驚くдарう！

この男の子が女の子だぜ？！

こいつ、男子に夢や希望をつめすぎだろう！

「……ていうか、名前にちゃんと女の子らしいのがあるだろう！不二子って！」

ああ、本当だあ。

影薄いんだな、この名前で顔で不二子って。

だって……ピュア・ホワイトって言うインパクトが隠されているんだもんな。

「そうか……女子であつたか…失敬……失敬？」

風も頭が混乱していたようだった。

「……まあ、お互い落ち着こうぞ。不二子・ピュア・ホワイト」
なんとナイスな省略だった。

この中で一番大事で、この中で一番地味な不二子と、インパクトありまくりのピュア・ホワイトを兼ね揃えた、グッドな名前だ。

思わず親指を立ててしまった。

「おいおいおい！　なんだよ！　俺の名前はそんなに短くないぞ！」

「いいじゃあないか、不二子・ピュア・ホワイト……ん、あれ。駄目だ。まだ長すぎるな。お前もう、あれだ。ピュア・ホワイトでいけ」

最後にはインパクトありまくりのピュア・ホワイトを重要視したか……。

あれ？

ていうか、いいのかな？

天使って敵じゃないの？

敵とこんな漫談してて大丈夫なのかな？

「人の名前をもてあそぶな！　……もういいよ、君たち。どうせ今だって殺す為にきたようなもんだし」

……きれた見習い天使は、ヤケクソにそつつばやいた。

一瞬にして、重くてカラカラな空気が雪崩れ込んできた。

「これから裁判を始めます」

それは、いきなりだった。

「……神は正しい。神は正義である。…神の言うことは絶対です」
こいつ！

目上の奴等に逆らうっていう考えは脳にインプットされてないのか？！

……嗚呼、そうか、こいつ天使だった？

都合の悪い所は覚えてないにきまっているか。

「判決が下されました」

……そしてそれは突然だった。

判定が早すぎだ。

もうちょっと悩みやがれ。

「白星風、無罪。即効に黒星に転生します。そして人間、佐藤隆史。判定不可により、白星風を転生させた後、天界に連行します」

納得いかなかった。

無罪ならそれで終わりでいいだろう？

ていうか、判定不可ってどういう事だよ、だからもうちょっと悩めっていつているだろうが。

ああ、そうだ、二審三審やろうぜ。

勝手にもほどがある。

「天界式、天獄波動砲」

何やら聞き覚えのない事を呟くと、ピュア・ホワイトの両手から何か、天使が出すものとは思えないほどの黒々しい物が浮かびこんだのだ。

俺はそれにぎょっとした。

絶句。

「……おい、風……」

「大丈夫」

俺の焦りは虚しく、風はこれっぽっちの焦りもなかったのだ。それどころかこの余裕ぶり。

何か奥の手でもあるのだろうか？

時を止めるのか？

時空を超えるのか？

……同じもんなのか？

そして、その次の瞬間。

その次の瞬間というのが、ピュア・ホワイトの両手から波動砲が発射されてしまった時のことなのだが……。

発射された事を一瞬で感じとり、凧が笑ったのだ。

凧が笑みをみせた瞬間に、あの有名なアニメ、新世紀エヴァンゲリオンにでてくるATフィールドのようなバリアが召喚されたのだ。凧に向かつてきた波動砲はそのバリアにぶつかり、焦点をずらして俺のすぐ真横を通り抜けていったのだ。

時差で凧が吹いた時に、俺は恐怖した。

今のがあたったら今頃俺は何をしているのか、と。

それと共に、感動訪れたのだ。

「すげえ」

「なんでだ?! お前何をした!」

ピュア・ホワイトが怒鳴った。

感動・恐怖する俺と、激怒するピュア・ホワイト。

そして、平然とピュア・ホワイトを睨む凧。

「何でだど? ……黙れ小童^{こわっぴん}。貴様と小生では、格も地位も年でさえも小生が勝るのである。つまり、だ。貴様は小生に勝つ事は0に近い。そうだな、貴様がLV・1で、小生がLV1000という感じだろう か? この999の差はどうやっても埋める事はできないぞ」

「……くそう! 俺がたかが星なんかにっ!」

その一言で、凧の眉がぴくつとひきつったのが分かった。

「口に気をつけろ、小童。何回も言わせるでないぞ。格も地位も年でさえも小生が勝る。貴様に勝利はありえないのである。子供^{こぎ}が。」

喰うてしまっぞ」

ああ、風。

そんな挑発的な事を言ってしまったら、ピュア・ホワイトのような気の強い性格の奴は……、

「うるさい！ 馬鹿風！ アホ星！」

ほら食いついたー！

しかもなんかすごい幼稚園児と小学生が言いそうな食いつき方！

「……もう駄目だ、こいつはいつまでたっても子供のままだ。…放っておこう。ほら、ピュア・ホワイトの応援が来る前に早く逃げるのだ」

「あ、うん……」

あれ？

と。

俺はここら辺で話しの方向性について思う所に気づいた。

俺は、自分の記憶がない。

記憶喪失だから。

つまり、俺には帰る所が分からないから、……半ば強制的に風の

手助けの為、黒星兄、銀を探す旅にでなくてはいけない状況にある？

「はは、そうふて腐れた顔するでない。少し気が進まんが、ピュア・

ホワイトのおかげで、一つ記憶の手がかりが掴めたではないか」

「……？」

記憶の手がかり？

「佐藤隆史。お前の名前だろう」

さとう たかし
佐藤隆史。

「……なんか微妙だな。もっと……こう、レンとかジンとか、格好いい名前のがよかった」

「そう言うでないぞ。親が悩みに悩んでつけてくれた名前なのだろう、きつと。隆史には微妙すぎる名前なのかもしれないが、親からしたら、隆史がこの世で一番格好いい名前なのかもしれない」

「…へへ、そうかな？」

「ああ、きつと。そうであろつと願おう」

風に手を引かれ。

後ろにピュア・ホワイトの怒鳴り声と睨みを感じながら、俺は照れ臭くなった。

そして、俺は二人に言った。

「これからよろしくな風、一応ピュア・ホワイトも。これから何度も顔を合わせるかもしれないし」

明日から、いや、今から。

普通の人間とは違う日常が待っている。

襲われて、攻撃して防御して。

それが俺の、日常になるだろう。

そうさ、そんな日常。

そんなんだから、人生を楽しめるのだろう。

兄という存在から俺へ着信（前書き）

兄再び。

やっぱり、偶然なんてのは驚きですね。

味付きのりから大まかな話しの書かれたノートを渡されて見たときは、『また出てきた。』って、思いました。（笑）
さらばメリーですね。

……メリーは今どこにいるんだろうか…。

この小説に一番重要なメリーがいないので、…今はメリー編ではなくて 編ですね。

あ、読めない人の為に訳します。

『天使によって化け物、黒星に転生されてしまった元白星銀を助けるべく、血の繋がらない白星弟風が下僕：隆史を従えて銀を探し旅をしていく編』です。

……嘘です。ごめんなさい。

ちなみに、 編つーのも嘘です。

どういう話編にしていいか分かりません……。

切実な悩みだよ……。

オレタチ βακκα...ーφ(。。(アヒヤ

兄という存在から俺へ着信

白星弟、凧の兄。

黒星兄に、俺は顔を半潰しにされた。

何が嬉しくてそんな奴を探しまわらなきゃいけないのか……。

「……で？ 何処にいるか、目星はついてるのか？」

「うん、一応。これでも隆史を助ける前にもいろいろ探し回って情報を集めていたんだ」

凧の兄、銀は、天使の裁きによつて黒星に転生されてしまった。

「大体はこの町を拠点として町を徘徊はいかいしている」

「この町って言つても……そりゃあ地図から見たら小さいかもしれないけど……ここは広いぞ？」

「大丈夫だよ、適当に過ごしてたら会えるから。確信はもてるぞ」

「？ なんだだよ？」

「さっきも言つただろう、君は神的存在なのである。」

俺は黙った。

小生より天使より、君は大きい存在。

凧は嬉しそうにそう呟く。

「違う、凧、俺は一般人。普通の人間だよ。お前と会つたのも、銀に顔潰されたのも、全部偶然に等しい」

「ふふっ」

何が面白かつたのか。

何がつぼに入つたのか。

凧は不気味に口角を上げた。

「……何だよ……」

「嬉しくないのかい？ 自分が神みたいに言われて」

「嬉しくなんかないよ。そういう性格なのか、記憶喪失でそんな性格になつてしまつたか知らないけど。……だって、神的存在つたつて不死身でも能力者でもなんでもないんだからさ。意味ないだろ？」

それに、ここは地球だぞ？ 『俺は神だぞ』 って言って、誰が信じる？ こんな未成年一般男児が神なんて、イエス・キリストを侮辱するなって言われるぞ」

「イエス…？ 誰だそれ」

知らないのか。

キリスト信者に抹殺されちまえ。

「地球に存在していた神みたいな人だよ」

「へー、過去形なのか。もしかしたら天界で天使をしているかもなあんなおじさんが天使？

やめてくれ、俺の想像する天使のイメージをこれ以上壊さないでくれ！

「……現世で違う奴に生まれ変わっているかもしれないし」

「現世？」

「人間には前世と前々世がある。昔を生きた人間が死し、天使を卒業し、そして人間に生まれ変わる。現在を生きる人間。隆史は、神だったのかも」

「馬鹿言うな。俺は普通に天使でいい……そういうお前はとうだったんだ？ 凧。天使だったのか？」

凧から笑顔が奪われた。

足の動きが止まり、前を向いていた凧の顔が、下を向く。

俺って今……触れたらいけないやばい事いっちゃった？

K・Y？

空気読めてなかった？

「小生は天使になんかなった事はない。小生は死んでからずっと星として生きてきたからな。何度天使に追われた事か。……その度に同じ星の仲間を犠牲にしてきたのだ」

「何でそんなこと……」

「いいかい隆史。確かに仲間は大事だ。だがね、仲間の命を気にしていたら、いつか自分が殺されてしまうのだよ」

「星って、いつもそんな事を考えるのか？」

「小生だけかもね。星は追われる身だから仲間意識が妙に強い」
俺が今一番に感じ取ったこと。

『凧』という星は、この世に写る星の何より誰より、一番強そうな流れ星より流星群より、冷血で最悪で危険なものなのだ。

可愛い顔したって、どうせ男。

ごつい性格で、がたついた生き物。

「そんなお前は どうして、銀を探す？ ていうか、探し出してどうするんだ？ 黒星が白星に戻る方法はないんだろ？」

「銀は小生の兄だ。血は繋がっていなくとも、生まれた所が違くとも、小生は銀を兄と思う。思いうろよ。だからこそ、小生は銀を殺す」

「え……？」

殺す？

兄を？

思いうろんだろ？

あれあれ、言っている事が矛盾している。

「混乱しているのか？ まあ、その気持ちは分かるが……星が天使に殺されるという事は、この上ない恥なのである。しかもそれが天使によって無理矢理に黒星にされた星であるとすれば、もうそれは『恥』の一言では済まされない……『罪』である。だからこそ、小生は小生の手で銀を殺してあげる。……少しでも銀を恥から解放させてあげたいのだ。……わかってくれるかい？ 隆史」

こいつは、もしかして、兄想いのいい奴なのか。

凄い男らしい考え方。

「……一匹狼なんだな」

「？」

俺は足を踏み出した。

「隆史……一匹狼とはどういう意味なのだ？」

「そんな事もしらないのか……」

「小生、日本語は大嫌いなのである。あとは納豆」

「納豆はいいよ、…一匹狼ってのは——……」

一匹狼について説明しようとしていた時だった。

ピロロロロと、何か音がした。

シンブルな。

耳に響く。

元から携帯のフォルダに入っている着信音の音。

そうだな、着信音2か3くらいの奴。

「隆史……これは携帯の音かい？ 君はいい成長期を迎えた年頃なのに、まるで電化系の取り扱いが分からないお年寄りみたいだね。もしかして、本当に携帯の使い方が分からないのかい？ だからこんな着信音しか設定できないのかい？」

すこし引き気味に聞いてきた凧がむかついた。

「記憶喪失なのに分かるわけないだろ」

「ほら、早くでないと切られるよ」

「分かってるよ……」

ダウンジャケットに入っている、見覚えのない自分であろう携帯を取り出し、おずおずと画面を開いた。

兄と一言表示されていた。

「凧、これお前のじゃん。兄って書いてるぞ、銀からだろ」

「小生は携帯など便利なものはもっておらぬ。それに、もし持っていて銀の番号を登録するのなら、表示名はちゃんと銀とつける。それに、格好いい着信音を使おうと思う」

「……うるさいな」

苛立ち、手に力がいり……。

不意にボタンを押してしまった。

「やばっ、押しちゃった」

「隆史っ？！ お前どこにいる？！ 俺から逃げられると思うなよ！」

怒鳴り声が聞こえてきた。

「何、俺って逃亡者？」

「知らぬ。早く返事をしなきゃ」

何なんだ俺の兄って……。

ピュア・ホワイトみたいな奴だなあ。

「もし……もし？」

耳に近づけたら大声で耳の鼓膜が破けそうなので、あらかじめ少し離して返事をする。

あつちには少し小さめの声で聞こえているだろうか？

「おい、隆史！ 白状しろっ！ お前いつも誰と話してる？！」
は？

何言ってるのこいつ。

いつも誰と喋ってるかって？

「えとー……？」

「ああ？！」

「母さんか…父さんか……い、…妹とか？」

俺って結構挑戦者な性格なのかも。

俺に妹がいるかも分からずに、でも本当にいるのだとしたら、結構、少し。記憶を取り戻しているのかもしれない。

電話越しから、ぶちつと音が聞こえてきた。

「ふざけるなよっ！ お前母さんとも親父とも仲悪いじゃねえか！
それに！ お前にいつ妹なんて出来たんだ？！ 名前言ってみろ
！」

「……さいあく」

「ああ？！」

「な……何でもありません」

答え、記憶はコレっぽっちも取り戻してはいなかった。

俺、こんなのが兄ちゃんだったんだ。

……まあ、大体の兄弟、姉妹関係に置いて、仲が悪いのは普通なのだろう。

「まあ、いい。早く帰って来い。もう外まっくらだろ」

時間の話しは何一つしていなかったが、今は夜6時を迎える頃だ

と思われる。

「帰って来いって……」

「ん？」

帰って来いって言われたって……帰る所が分からない。

まさか記憶喪失を自分の兄ちゃんに晒すわけにもいかないし、どうしたらいいんだよ。

「……隆史」

横から、凧の声。

救済の声だった。

あれ……本当に救済の声なのか？

何か目がキラリンと鋭い。

「？ 隆史、誰かと一緒にいるのか？」

「あ、いや。と、友達！」

「友達いないの知ってたぞ」

ああ、そうだ。

俺友達いないんだった。

……確か、友達いないっつー嫌な事だけは覚えてたよな、俺。都合の悪い記憶喪失だな。

「いやあ、さつき……意気投合しちゃってさー……」

「そんな都合の良い事があるか馬鹿。変質者か？ ……隆史、携帯代われ」

代われって言われても……。

凧とアイコンタクトをする。

じーっと、まじめにこちらをみる凧。

……さて、そのまじめな目は、何を表している？

「……隆史？ 早く代われ」

「……」

何だその目。

やだ、嫌だぞ。

代わるとかないぞ、お前、何言おうとしている。

「……………」

黙って、俺の携帯に手を伸ばした。

「おい、大丈夫なのか？ 仲の悪い兄だったって、俺の身内だぞ」

「隆史？ お前何言って……………」

やば、聞こえてしまった。

小さな声で言ったつもりなのに…………地獄耳かこいつ。

「こら、風っ！」

凄い馬鹿力で、物凄いスピードで、風は俺の携帯を取り上げた。

「あー、もしもし？ って言っただったか……………」

「あ？ 誰だお前」

終わった…………。

俺、もし記憶もどつても、家に帰れない。

…………恥ずかしすぎるぜ…………。

「隆史の友達の、風という…………いいいます」

風、棒読みはやめてくれ。

「今日は小せい…………僕の家泊まるので」

「はあ？！ 聞いてねえよ」

「当たり前です、今初めて言っただからです」

「…………喧嘩売ってんのか？ 買っぞこの野郎！」

馬鹿か！ 買っなー！

「では、コレにて御免」

少し低いトーンで。

おそらく本人はちよつと格好つけたのだろっ、俺を見ながら笑みを浮かべた。

そして、混乱している俺の兄を差し置いて、俺に携帯を返したのだ。

携帯の通話を切る所が分からないから消せと。

もう、命令だったのだ。

「…………お前っ」

「早く、格好がつかないだろう」

一指し指をそつと伸ばし、切るボタンを強く押した。

プツつと音がして、プーっプーっとな音がした。

「格好つかないなら最初から変な真似するな」

「はて？ 変な真似とは何ぞや？」

あくまでしらを切るつもりか。

「身内に、『息子さんは預かった』風な感じな電話をするな！」

「隆史は甘えん坊なんだな、生意気小僧なだけかい？ …… ああ、

今の隆史は反抗期時代突入しているんだったかね？」

「ぶっ殺したい」

そして、また都合の良い悪い所で携帯が光り鳴った。

着信表示は兄。

「またかかってきた」

「着信拒否と言う機能があるのだろうか？ それだ、それしよう」

「……警察に通報されるかもよ？」

「警察？ ふふっ…… そんなもんは知らん。小生の辞書には載っていない」

「載せとけ」

意味不な着拒。

そしてム力つく風野郎。

「ほら、行こう。探そうぞ、銀を」

「…… ああ」

気が進まなくなるうちに、足を進める。

「ていうか、今日はどこで寝て、どこで食事を取るつもりですか」
重大な疑問だった。

あのまま風の住む家に帰っても、ピュア・ホワイトやその応援の奴等が待ち伏せしているかもしれないし…。

「未成年は無駄な心配をしないことだ。将来すぐにハゲてしまっぞ」
「……」

「小生、こう見えても金は沢山もっているほうなのである……金貨や銀貨などではないぞ？ れっきとした日本金なのだぞ！」

「あー、うん。そう願ってるよ」

台詞棒読み。^{せりふ}

「隆史、利口にしないと外で寝かせるよ」

凧が苛立った。

…… 本当に、内面と外面の差が激しい奴だな、こいつは。

「殺す気かつ?！」

いっただろう、……この世に偶然等と言う物も必然と言う物も奇跡等も、人間の想像を遥かに超える程あるのだと。

偶然には偶然がかさなるもの。

である。

一つ目の偶然は、凧に出会ったことなのだろう。

そしてもう一つの偶然。

それは、こいつ。

「隆史っ!」

……。

「お前、何着拒なんかしてんだよっ! 馬鹿野郎!」

俺が着拒した相手。

「……」

俺の、兄ちゃん。

「あ……ああ」

だけではなかった。

口がまわらねえ。

「……どうした?」

体全体が混乱している俺に加え、目を見開いて脳だけを混乱させる、凧。

そして凧が口にする名前。

「……銀」

充血した目をぎよろつとこっちへ向けて、大きな口をあけてヨダレを垂らしているのが伺えた。

紛れもない、あいつ。

記憶をなくす以前に俺が最後に見たと思われる。

こいつ。

「…なんで……」

凧と銀と俺

俺の兄ちゃんは、怒っていた。

「何をやってているのか」と。

「よくも俺様の電話を着拒してくれたな」……と。

これからどれだけ罵声をあびるのか…そんな事を考えると、気が遠くなった。

その前に——俺の兄ちゃんの後ろにいる奴。

「銀…」

なんでいる？

なんで今いるんだよ？

「……黒星、兄」

黒星、兄。銀はそこにいたのである。

憎らしい顔をして、アホらしい目つきをして、俺の兄ちゃんの後ろでこつちを艶め^{なま}かしく睨んでいる。

また殴られる、…今度は本当に死ぬぞ。

「兄ちゃんは大丈夫なのか？」

「？」

…もしかして見えないのか？ あんなに濃い息を吐いているのに？
今思えば、人間って不思議だ。

「気を抜くな。あやつ、隆史の兄か？」

「うん」

「一見、見えていないようにも思えるが、中には平静を装って実はもう操られているだけかもしれない、殺されてる奴もいるんだよ。
いきなり襲ってくるぞ」

「ええ?! 駄目だよ、俺にどうしろってんだよ! 空手も柔道も剣道もやってねえぞ、…やってんのは塾だけだ」

まさかこんな事になるとは思っても見なかったし…いやあ、こんな事になるって予想できるのは超能力者とかぐらいだろうか？

「大丈夫、自分を信じる、お前は『神』だっ！ 不可能を可能に、偶然を必然にする『神』だっ！！」

おーおー。

そうだ、俺は神だ。

紙でも髪でもなく、神だ。

やろうと思えばスピリット・オブ・ファイアみたいな精霊スタンドを呼び出す事も霊丸^{れいがん}だってかめはめ波だってうてる筈だ。

そうだそうだ、気をしっかり持て俺！

ほらほらほらほら、…だんだん力が沸いて来て。

沸いて来て…。

沸いて…。

「駄目だ！ 無理！ 俺超へたれだから無理！ 俺には仏陀^{ぶつだ}やミカエルを超える力は持ち合わせていねえよー！ あんな化け物と戦えるかよー！ 戦わなくても逃げられもしねえよ！ 助けてくれー風

ー！！」

「馬鹿、隆史！ 小生を頼るな！ それに、銀は『化け物』ではない！ 銀は黒星なだけである！」

「そんな奴を殺そうとしてんだろぅがよーっ！」

兄差し置いて、喧嘩に突入する所であつた。

俺が指を指していたそいつが、突然声を上げたのだ。

「ヴォオオオオッ——。っと、まるで獣のように。」

「……何？」

「銀が啼いてる」

けたたましく、勇ましく、銀は俺達の口喧嘩を止めるかのように、啼きあげた。

風が俺等を襲う。

びよーっと、銀のなき声に共鳴するかのように、嵐の少し前の風が吹き荒れたのだ。

「寒っ……ていうか怖っ……！」

「隆史！ ……俺さっぱり分けわかんねえよ。ちゃんと説明しろ！

なんだよ殺されてるって、俺死んでねえし、それにそいつ誰だよ？ さつきいつてたお前の友達か？ オカルトならオカルトでいいから、教えてくれよ、隠し事はなしだろ？」

「……」

なんか俺、自分の兄ちゃんのイメージがさっぱりつかめない。

仲悪いんじゃないかったのか？

それなのに、『隠し事はなし』ってどういう事だよ……？

これは、話した方がいいのか？

風の事銀の事、天使の事も、自分が記憶喪失って事も。

でも、今そんな事話している時間はない。

頭がパニくっている。

「あ、……俺」

「隆史っ！」

風の芳しい声^{かんば}が耳に飛んだ。

「……下手に口を滑らせるでないぞ、お前の兄は関係のない人間である。…殺されるぞ」

「分かった……」

その瞬間に、兄ちゃんが下唇を噛みながら、とんでもなく苛ついたような顔をした。

「隆史……」

いや…悲しがつてる？

よくわからない。

「どこか違うところに行くぞ、銀を誘い込むのだ。ここには人間も住宅もある。広いところに行くのだ」

「うん」

とにかく、今は兄ちゃんの事は考えない方がいいだろう。

風について行って、風の手助けをして、そして自分の記憶を取り戻して——それから兄ちゃんや母さん、父さんのいる家に帰ろう。

「……風、どうやって誘うんだ？ 走ったところで、銀は付いてくるのか？」

「前に話しそびれたが、星はお前みたいな神に近い奴が大嫌いなのである」

「お前！ 俺の事嫌いなのかよっ？！」
吃驚だ。

「小生は他の星と考え方が少し違うのである。小生はお前の事を嫌いとは思っておらぬ。……話しに戻るが、黒星になつてしまつと自分の行動を強制できなくなつてしまふのだ。自分を自制できなくなつた黒星は、お前を殺そうと追つてくるであらう。…お前が走れば、銀も追つてくる……分かるかい？」

「……ああ、じゃ。俺が全力疾走で銀と戦えるような広い場所へ行けばいいんだな？」

「完璧だ。偉いぞ」

「それくらい分かるよ！」

あまり転ばないように、靴についていた氷除けスパイクをONにした。

銀は俺をじーつと見て、何か感付いたのか、膝をゆっくり落とした。

「走る姿勢である」

「まじかよ、速そう……俺あんま早くないよ？ 陸上とかやってなかったし」

「大丈夫。星の走行速度は人並みである」

ああ、そうですか。

全く。見かけによらないな……。

まあいい。

最後に1つ、いってもいいですか。

「兄ちゃん、俺、もう行くから。……すぐに帰るから父さんと母さんに言つといて。『隆史はお泊り』って……伝言よろしく」

「……」

なんか今のかっこよかった。

最後の別れ。……なんて辛気臭いものはしない。

今日の別れ。

沈黙が訪れ、銀は丁度間の良い所で手を振りおろし、銀は走った。

「いくぞ隆史！」

「あぁっ！」

凧も走りだし、最後に俺が走った。凧の背中を追い、俺の背中を銀が追う。

手と足を生まれて初めて真剣に動かした。

死がかかっている競争。

兄ちゃんが何度も俺にむかって喋っている事は分かっていたが、俺は全く答えはしなかった。

凧が曲がり角を曲がって曲がって、俺は凧の背に必死でついていった。

「……っ！」

そのときに、ひどい追い風が吹いた。

不気味な追い風。

「っは——！」

銀はもう5メートルもないところにいたのだ。

予想以上の銀の足の速い事であった。

「凧っ！ 銀が！」

「……っくそう！」

スタートが遅過ぎたわけでも、別に俺等の走る速さが特別遅かったわけでもなく、ただ、銀の足が速かったのだ——ただ、自転車よりちよつと遅い速さ。

である。

「隆史！ 走れ！ 中央公園だ！」

中央公園？ そこに向かえって事か？

脳内の全細胞を走る事に集中させている為か、よく頭が回らなかった。

「っ……凧？！」

「とにかく中央公園に行くんだ！」

そう言い残して、驚いた事に風は止まった。

一瞬にして視界から風が消える。

「っ！」

俺は後ろを振り返らなかった。

とにかく走った。追い風が向かい風に変わっても、転びそうになっても踏ん張った。

そうして、中央公園。

まさしく中央公園のど真ん中近くで、勢いよく俺は転んだ。

ひゅーひゅーゼーゼーと息が切れる。

「……あぎ？」

口がうまく回らない。

思い切り後ろを振り返っても、風は俺を追っては来なかった。
1分、2分。

だんだんと息が回復していき、足が軽くなってきた所に、俺の視界に変化が現れた。

暗い影。

「銀……」

不幸はいつまでも不幸なのだ。

銀の姿が伺えた。

……銀の姿は伺えたのに、風の姿が伺えない。

ヴオオオオーッ！！ また、銀が啼いた。

さつきとはまるで違う、ティラノサウルスみたいな恐竜のなかの恐竜のような、さつきよりも凄いいけたたましい鳴き声が耳に響く。

俺はその勇ましさに驚愕した。

驚愕したところで、俺の心にも変化が見えた。

怒りと恐怖に燃えて、不安と緊張と興奮に震え。

この手で殴って、この足で蹴り飛ばして、この頭顔で頭突きたい

葛藤。

「お前！ 風は何したんだよおっ！！」

神の『そうぞう』

俺の声が響いて響いて、響き過ぎて、ふと何処からかうるせえと苦情が聞こえたのがわかる。

でもそんなこと、苦情なんて今はどうでもいいのだ。

今着目しなければいけない重要点は、何故、風より速く銀が着ているのか——何故、銀なのか、風は、今何処にいるのか。

である。

へたれな俺でもさすがに怒鳴ってしまう。

頭が普通より良い俺の脳内は、不思議な事をばんばん募らせていく。

「うおおおおー！」

そのかかも、銀は鳴き続けた。まるで風や俺を蔑むように。

「風どこだよ、風連れてこいよっ?!」

「……」

「…なんだよ？」

銀は突然啼くのをやめた。

また襲ってくるんじゃないのかと、俺はへたれモード全開にしたが、銀はその気配を全くださずに黙っていた。

死んだのかと思いい声をかけているのだが、小刻みに動いていて息もしているようだし……。

「銀？」

「お前は確か、隆史といったな？ 何故人間が某等それがしの姿をその目に写せているのかは知らないのだが、無礼な奴。某は、お前のような霊長類に呼び捨てにされるほど落ちぶれてはいぬ。この秋庭院家嫡男、秋庭院 銀を侮辱するでないぞ」

喋らないと思っていた黒星、銀が喋った。

しかも、織田祐二に対抗するかのような言葉と意味の分からない言葉。

「靈長類なめんなよっ！」

「……しゅうていいん？ それはお前の……貴方の名前か？」

「敬語じゃないのが負に落ちん」

「貴方の名前ですかっ！」

ム力つく野郎である。

「苗字だ。貴様、秋庭院の苗を知らないのか？ 今時物珍しい奴だ」
今時？

何、俺の兄ちゃんも、兄ちゃんの友達も俺のクラスメートもその親も、……全国的に『秋庭院』って知れわたっているのか？

それだったらまちがいなく今年の流行語大賞になりうるぞ。

「さて、……普通一般以下の虫けらカスにいろいろ教えこんでしまった。本題に入ろうとするか」

自分がいきなり喋っていきなりおかしな話し吹っかけて来ただけなのに、何故俺の存在を虫けらカスにされなきゃいけないんだ？

……そもそも、虫けらカスって、虫より格下じゃねえかよ……虫のカスって、汚ねえし靈長類は愚か、生きててもいねえ。

「風は喰った、丸呑みである。こいつはかなりの上物だな……ふぉん」
変なセキをして、銀は舌で上唇をなぞった。

どくんと胸が波打つ。

「……狂ってるよ……お前。兄弟って事を忘れたか？」

そうだ、狂っている。

「忘れてなどおらぬ。だが少々、頭が回りにくくての……知力低下、障害者並だ。物事を考えようとすると頭痛が必ず起きる。仲間を喰おうが何を喰おうが、某には全ての物が美味に感じる。味覚も嗅覚も麻痺してしまったのだな、きつと」

「……だからって喰うのか？ お前の弟だぞ、お前の為にお前を殺そうとした、白星、弟だぞ?!」

「ぐふふふう……白星ね……。お前は何も分かっておらぬのな。馬鹿じゃ馬鹿、お前は馬鹿である」

奇妙な笑い声で、銀は俺を見下す。

「白星はいつか裁かれ、黒星にされ、消滅される。……なればどうだ？ この際某が飲み込んだ方がこいつも報われよう？ 考えられぬ頭でこれだけ考えて辿り着いた答えじゃ。弟想いの良い兄だろう？」

「……弟想い？」

「ああ、そうだな、確かに弟想いな考え方だな。」

「だけど、それじゃあ風は報われないよ。……風はお前の為に身を犠牲にしてまでお前を殺し助けようとしているんだぞ」

「殺す？ 某を？」

「銀が汚く呟いた。」

「細いめを更に細くして、自分の腹に爪をたててこう言った。」

「馬鹿にするな。お前に某は倒せん。おとなしく胃酸で溶けなされ」
「プニプニと腹を押した。」

「……それがお前の……弟想いか？」

「そうだ」

「とんだ勘違い野郎だな。お前と風では想みが違う、違いすぎるぜ。……へたれな俺でもわかる。お前は弱い。ああ、でもそうだよなあ。」

「お前、天使につかまって裁かれたんだっけ？ ふふは……。馬鹿」
「挑発である。こいつはどこか許せなかった。」

「絶対に許せない。だって、風をけなしたから……。」

「お前……。っ、許せぬ」

「……俺だってお前、許せないよ。死にたくわない、けど……俺、お前の事殺したい」

「もう、自分でも何が言いたいのかわからなかった。」

「激怒と欲望。」

「……虫けらカスごときに何ができる。某は秋庭院 銀であるぞ」
「その秋庭院って名前、今の時代で知ってる奴はいないと思うぞ。」

「……古いんだよ、時代遅れだ」

「今時テツ&トモにはまっている奴よりも時代おくれた。」

「どこまでもけなしてくれるな……貴様」

「知っているか？ 風いわく、俺神様の存在らしいぜ？ 神様からの生まれ変わりがかもしれないんだよ。星よりも天使よりも格上だ。お前なんて否じゃないぜ、カス野郎」

「怒りである……！」

「ご丁寧に自分の現在進行形動詞を呟き、その口にある牙を俺にみせ、威嚇^{いかく}始めた。

もうすぐだ。

もうすぐ、俺の最後が始まる。

このまま何も出来ずに一瞬で殺されるって事は多分無いとは、さっきの追いかけてこからしては無いと思うのだが、なにしろ俺は――戦う術なんてものは何一つもっていない。銀の少しの走りの速さと、あの攻撃力に対抗できないと言う事。

それが出来ない、風を助ける事もできない。

丸呑みにされた風を助け出すには、腹を裂くか吐かせる……一寸法師が鬼に喰われたときみたいに自分で対抗して出て来てくれればいいのだけれども、そんな事ができるならとくに今頃には出てきているだろうし、まあしょうがない。

……いや、しょうがないよ。

格好いい事言っておきながらあっけなく死ぬとか、凄^{すご}い恥^はずかしい事だよ、恥だよ。この際奇妙なプライドは捨てたのだが、これだけは絶対譲れないし、酷く譲られない。

神は迷った。

神とはもちろんの事、この俺。

何故今頃頑なに拒否ってきた自分のその微笑ましい称号を突然肯定し始めたのか――それはある意味一種の現実逃避だ。

ある意味へたれ症状。

ある意味現実とは思えられぬリアルな非現実、俺の頭はパンク状態なのだ。

頭パンク状態の神様である。

ああ、もう！ この際何でもいいから槍でも鞭でも剣でも弓でも

棍棒でもでてこねえかな？！ R P G 的な感じな奴！ それがあれば少しは太刀打ち出来るだろうし。……ねだり過ぎなら今の注文全部却下で俺の足を早くしてくれー！！

なんて、そんなくだらない願想。

そんなちんけな妄想。

そんなありきたりな想像。

そんな夢物語な幻想。

——あれ？

妄。^{ほう} 神は幻を思いつき、神はでたらめな物事を願う。

つまり、想像を創造する。もつと分かりやすくいえば、妄想↓心の中に思い描いた現実にはありえないような事を、創造↓新しく創り上げる。

「俺が創造すれば——その通りになる……？」

風は言ったのだ。

君が、小生や銀。いけ好かないアホ天使より高い格の持ち主って事をだよ。『神様』あえて言うならそうであろうか

そう、神様。

「どうした虫けらカス、フリーズしておるぞ。怖気づいたか？でも残念じゃ。お前は殺すぞ」

何を勘違いしたのか、銀は高笑いをした。

違う違う、そんなんじゃないよ。状況は形勢逆転の模様。

さて……俺は何を望もうか……？

——想像したものは何でも望めるのか？ いや……それは余りに無敵すぎる。武器を想像するか？ ……でも、考えてみてもそれは危険すぎる。第一、剣道やっていたわけでも弓道やっていたわけでもないし、銃だつてきつと使い方わからないだろうし。……やっぱり、戦わずして風を助ける方法をとったほうがいいのか……？

「じゃあ、やっぱり……」

俺は目を閉じて想像した。

脳の神経をその想像に注ぎ込む。

「おうん？ ……」

銀の胃から、風を出す。銀の胃から、風を出す。
そればかりを考えた。

「ごぶっ …… うん？ 違和感じゃ」

「 …… !」

目を開けると、銀が何やら具合悪そうに腹を抱えていた。
まさかとは思っけど、本当に出てくるのか？ こんな甘えた想像
なのに？

「神って残酷」

「 …… ぎ…さま…某に、何をしたっ…っ？ 」

「何もしてない、ただ想像しただけだ。お前の胃の中から、風を出
すって」

「そ…… ぞう？」

「塑像^{そぞう}じゃねえ… 想像だ。意味違いすぎるだろ」

腹の窮屈さと、違和感と、気持ち悪い感覚に、銀は尚ももたえ続
けた。

厄病神みたいな神

「うぐう……うむうう……不覚であるっ……！」
ん？

さすが、似ていなくても兄弟なんだな——しゃべり方はそっくりだ。あと微妙なところで傲慢な性格もそっくりだよなこいつら。

……いや、悪い意味で。

「ふぐつ……隆史といったな」
「？」

「お前を虫けらカス呼ばわりした事は謝ろう。……お前は強い……はあ。どうだ？ 某と共に行かないか？ お前は特別に某と同等の地位をくれてやる」

これってもしかしてのアレらしい。

負ける前の悪あがき。

もしかして敵が情けをかけて自分を助けてくれるかもという、夢妄想。そんなことは1億分の0・01に等しいというのに、これが俗に言う——。

「見苦しい」

大体だ。

俺は銀みたいな化け物になりたくはないし、同等とも思われたくない。俺からしてみればそれは最大級の侮辱。全く気付いていないただけだな。

「そうか……ふう……残念だ。——一つだけ聞く。某は死ぬのであるうか？」

「俺が創造すれば、多分……死ぬ」

一つ風が大きくうなずくと、銀のさつきまでの重苦しい殺気が水に流されるようにどんどん小さくなっていくような気がした。そして風が一吹きすると、ドサツと降り積もった雪の上に座り込み、自分の腹に10センチ弱はありそうな爪を押し当てた。

「おい、ちょっと…何してんだよ……？」

「今からする事を、目を閉じずに見ていなさい。……絶対に、閉じてはいけぬぞ。コレは某がお前に呪いをかける呪文のようなものである。目を、閉じてはならぬ」

俺に呪いをかける呪文。

銀はそっくり、俺の目の前で一気に爪をねじ込んだ。ぐりぐり、ぐりぐりと腹に爪をねじ込む。まるでドリルのように。

だがどうだろう。顔は何故か微笑んでいた。にまあと薄く笑窪えくぼを作り、時には苦しそうな顔をした。

奥までねじ込まれた爪は、横にノコギリのように腹を裂く。青黒い鮮血が滴り落ち、俺は吐きそうになったのだが、咄嗟に口を押さえた。

一先ず指の手の力を緩め、ふうふうと息を整えてからまたノコギリのように原を裂く。意識を飛ばさないのが改めて人間離れしている事を俺に証明させた。

そして、銀の身体が光を帯びた。

これは……死ぬと言っ合図？——それとも。

腹から爪をぬくと、するとどうだろうか。ズルツと尻の手がだし無く落ちてきた。まるで風呂場に捨てられた火サスに出て来る殺人被害者のような感じ。

「な……ぎ」

青い鮮血に流されるようにして、どんどん尻が出てくる。頭、胴体、股関節、太もも、膝。足がすべり落ちる時には、銀の右目辺りが光で霞んで、透けていた。

俺にはわからない。

何で今更こんな事をするんだ？

自害というか、……自分をどんどん悪い方向に、死に追い込んでいる。別に俺はこんな事創造したわけでもない、したくない。

「みたか隆史。ちゃんとその目に焼き付けたか？」

「……うん」

「そうかそうか、……それは良かったよ」

「なんで……そんなことしたんだよ、……お前は風や俺を殺したいんじゃないのか？」

「ふふっ……馬鹿を言うな。某は今でもお前達を殺そうとしている。それをどうだ、コノありさま。お前が想像したからだ」

「ちがうつ！俺はそこまで想像していない！」

「そうだ、俺はそんなことは想像していない。」

銀の腹を裂いてまで風をだすとは想像していない。ただ、銀の胃の中から風を出すって……。

あれ？

「銀の胃の中から風を出す……って……」

「どうやって……某の胃の中から風を取り出すんだ？」

「それは——」

まさか……それはもしかして。

「某がお前に知ってほしかったことだ。……お前は己の持つ力を小さく見すぎている。甘く見るでないぞ小僧。お前が創造すると確かに現実化する。……だが、ということは、人々を殺したり、世界を滅亡することだってできるのだ。お前が少しでも想像し、現実化を思ふとそれはいかなる場合にも現実になる。……どういう意味かわかるかや？」

「……俺は、何も願ってはいけない……？」

「ちがう、自分を捨てるのだ。それができなければ、死んでしまえ」
「……」

死んでしまえなんて言われたのは、生まれてきて初めての事だった。

しっくりと身に染みて、手足が震えて脳にいつまでも響いた。悲しかった。悲しくて、俺はこれまでになく傷ついた。

「だってそうだろう？ 某でこの有様だ。お前は世界を血に染めたのか？ グロテスクが好きか？」

「いや……血も嫌いだし、グロイのはもっと嫌だ」

「じゃあ、どうする？」

死にたくはない。だからといって、自分を捨てるのがどういう事かもわからない、……怖い。

……。

「わからないのであれば、お前は某と一緒にここで朽ちよう」

朽ちる？　ここで？　10年後半も生きていないのに？

ここで、こんなところで……対した思い出も無いこんな錆び付いた遊具の傍で？　……そんなのは嫌だ。絶対に嫌だ。

生きたい……！

「ほう」

「？」

その瞬間に、どこからか声が聞こえた。

「隆史が、やっと自分から本音を見つけたなんて……それもまた進歩。成長したね、こんな少しの間に」

「……だれ？」

見渡しても誰一人それらしき人はいなかった。

同じ年くらいの女の子の声。妙に脳の中を響き渡って、冷たい暴風が襲ったって声は凄く良く聞こえた。

「こんな刺激与えても記憶は戻らないかあ……そうだよね、やっとギリギリ私と喋れるようにまで回復したんだもんね……まだまだか」

「……お前……誰だよ？」

「何時間かぶりだね、私はメリー。隆史の脳の中にいるの」

幽霊？　それとも……俺は2重人格で……そうだ、もう一人の自分

(女)と話せる能力がついていたのか？！

「うーん……残念。私は幽霊ではないことはつい最近隆史によって解明されたんだし、私は君のもう一人の自分ではありません。お断り。私はそんなにへたれではないし、人生経験は君の何万倍はしているんだよ？　ダイナミックじゃない勘違いはやめなさい」

なんだこいつ……いきなり喋りだしてべらべらべら……悪口つていうのか、堂々とした嫌味言いやがって……。

ていうか……俺の心ん中よんだ？！

口にだして幽霊だとか思ってないのに？

「お前……本当だれだよ？ 俺にテレパシーでも送ってんのか？！」

「私は厄病神みたいな神。よろしくね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7154h/>

ア・DAY・いん・アワ・Life

2010年10月9日23時52分発行